佳作

未来の自分へつなぐ健康と夢

福島県立会津学鳳中学校
１年　甲斐　泰平

「泰平君は小児糖尿病です。」

小学４年生の時､私はかかりつけの小児科で糖尿病であることを告げられた。正確に言えば先生から病名を告げられたのは、横にいた父だった。私は何となく嫌なことなのだろうなと思ったが、それ以上に父の深刻な横顔が印象的だった。

当時、私はお菓子やアイスクリームを食べすぎていた。父母が共働きで、夏休みなどは一人で家にいることも多く、ポテトチップスを一袋食べてしまったり、６本入りのアイスクリームの箱を１日で空にしたりということもあった。その結果、私の体重は小学４年生で 85 キロになってしまい、病気にかかってしまったのだ。

私は大きな病院へ移って治療を続けることになり、主治医の先生のアドバイスに従い、食事療法や運動療法に取り組んだ。父母も、

「家族みんなで頑張ろう。」

と、食事や運動にいろいろと工夫をしてくれた。糖尿病は、早く治さないと失明や心臓発作などの合併症を引き起こすおそろしい病気だ。私は大好きなおやつやトンカツなどをがまんして、苦手な野菜をたくさん食べるようにした。特に、大好きなアイスクリームを食べられなくなったのが一番つらかった。運動は父と毎晩ウオーキングをしたり、家でエアロバイクを漕いだりした。運動が苦手な私にとっては嫌な時間だったが、これで糖尿病が治るんだと思い、必死に取り組んだ。

そんな毎日を送りながら、私は月に１回通院した。血糖値は少しずつ下がってきたものの、正常値には程遠いものだった。いつも病院でがっかりすることが多かったが、私を救ってくれたのは主治医の先生の言葉だった。先生はいつも私の血糖値を見て、

「高いなあ。頑張っているのになあ。」

と、私の頑張りを認めてくれた。そのように私に寄り添ってくれる言葉がとても励みになった。

ただ、私は病院でもう一つ気になることがあった。私の通う病院はとても大きな病院だ。患者さんも多く、小児科の待合室では具合が悪くて苦しそうなのに何時間も待っている子どもたちがいた。そういった子どもたちのお父さんや

お母さんたちも、とても不安そうな顔をしていた。
「どうしてこんな時間がかかるのだろう。」
　私は疑問に思い、インターネットで福島県の医師数を調べてみた。すると、平成 30 年度における福島県の医療施設従事医師数は人口 10 万人あたり 204.9 人で、全国平均より 41.8 人少なかったのだ。しかも、福島県は東京のように人口が集中しておらず、広い県土に散らばっているため、医療サービス提供が難しい地域があることも知った。
　さらに驚いたのは、私の住む会津地方に限定すると、人口 10 万人あたりの医療施設従事医師数は 189.5 人と福島県の数値より 20 人近くも少ないことがわかった。
　どんな地域に住んでいても、命の重さに変わりはないし、田舎に住んでいるから助かるはずの命も助からないというのは、少しおかしいと思う。田舎があっての都市、都市があっての田舎であり、それぞれの地域のそれぞれの特色を生かした産業を築いているから日本は素晴らしい国なのだ。
　私は心に決めた。自分も医者になって多くの命を救える人間になるのだと。そして苦しみながら何時間も待合室にいる子どもたちを少しでも早く診察してあげるのだと。
　医者になろうと決めた私は目標を定めた。まずは自分が健康でいることが大事だ。だから、自分の病気を早く治そう。私はウオーキングやエアロバイクの時間を倍にしたり、筋力トレーニングにも取り組むようにした。ご飯も白米より血糖値の上がりにくい麦飯に変えた。麦飯はボソボソしておいしくなく、おやつやアイスクリームを取り上げられた私にとって唯一の楽しみだった白米まで取り上げられた瞬間だった。
　しかし、血糖値はなかなか下がらない。そのため、私は中学校入学後は剣道部に入部、運動にさらに力を入れるようにした。私の家の近くには、鶴ヶ城と會津藩校日新館跡地がある。かつて、そこで剣道や学問に取り組み、戊辰の役で最後まで戦った会津武士の姿を目に浮かべ、身が引きしまる思いがした。
　私はそのような思いで必死に剣道に取り組み、入学から３カ月後、血糖値を正常にもどすことができた。
　今、私は自分の健康と夢のために、剣道と勉強にはげんでいる。数十年後の自分へ、あなたに健康な体と会津の医師になるという夢を必ずつなぐから、あの主治医の先生のように、子どもの心に寄り添った治療ができる医師になってください。